

を渡そうじゃないか。いらなと思うたら捨ててもらって構わんよ。」

「草の、種？」

「そうじゃ。」

「わ、分かりました。」

すると、老人は重い咳払いをすると、一つの長い何かを聞かせてくれた。それは何か、沢山の矛盾を抱えていて、ボロボロの布みたいにみずぼらしくて、しかし音楽的で、さも意味があるように聞こえる。「僕」そのものを探しているようで、でもどうしようもなく外世界からの救いのように「あなた」を求めていて。聴かれることを強く切望していて、でも易々と触れてほしくないように。全てをあらわにしているのに、ありとあらゆるところに何かがあるひそんでいて、そして好かれるとか、嫌われるとかを全く気にしていないようだった。ただ、深く深くまで降りてきて、抱きしめて欲しいだけなんだろうか？ 世界征服でも目論んでいるんだろうか？

老人が最後の一節を終えた時、何故か胸が温かくなった。

「わしはな、これは詩だと信じておる。」

老人は言う。

「君も探してみるといい、ふと何かを言葉にしてみたいと思える瞬間を。」

老人の名前も聞き忘れたまま、来た道に戻るともうそろそろ次の講義の間だった。僕は急いで教室に駆け込む。不思議な気持ちだった、ドアが閉まること、ペンが落ちそうになること、知らない人が寝ていること、ありとあらゆる「こと」に何か別の言語表現がないのか、考えてしまった。教授の念仏のような講義にリズムとメロディーをかすかに感じてしまった。また、そのことすらも何か別の表現方法を考えてしまった。それは帰り道になると、とうとう頭の中を独占しだした。木が揺れること、ゴミが落ちていくこと、それを見ても見ぬふりして人が通り過ぎること、この視界の中にその三者が共存していること。電車が定刻通りに来ること、沢山の人が乗っているのに誰も話しかけないこと、とにかくこの世界には「くぐりであること」をそれ以外の表現で表すことができるのではないか、と考えてしまった。そしてつ